

## 男が癒し手になるとき

— 『マーティン・チャズルウィット』にみる看護の諸相—

When a Man Becomes a Nurse:  
Aspects of Victorian Nursing in *Martin Chuzzlewit*

西垣 佐理

Sari NISHIGAKI

### I. はじめに

病および看護の場面はヴィクトリア朝小説における1つのトポスであり、物語において重要な転換点となる場合が数多くある。チャールズ・ディケンズの前期小説の一つ『マーティン・チャズルウィット』では、看護の担い手として、悪名高き「産婆」兼「看護師、寝ずに付き添う看護人、死者に関する名もなき業務執行人」(374)であるギャンプ夫人や病院看護師のベッティー・プリッグが登場し、ディケンズがこれらのカリカチュアの人物像を通して、当時の職業看護師および看護の実態を告発したこと、そしてそれがフローレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale) らによる後の病院・医療制度改革や看護師たちの意識改革に少なからぬ影響を及ぼしたことはよく知られている。

しかし、『マーティン・チャズルウィット』における看護はギャンプ夫人らプロの看護師だけが行っているわけではない。物語の展開という点では、むしろ、主人公マーティン・チャズルウィット青年と従僕マーク・タブリーが、アメリカの開拓地エデンで熱病にかかったとき互に行う看護こそが重要な位置を占めているのだ。なぜならば、男同士の看護場面は、マーティン青年がそれまでの利己心を捨てて改心に至る契機をつくりだし、物語の大きな転換点をなすからである。

このように、看護は社会風刺の要素であると同時に物語展開上の鍵にもなっている。実際ディケンズの小説においては、ほぼ全作品で看護の場面が登場し、物語上欠くべからざる要素となっている。なかでも、男性による看護と女性による看護の両方を含む『マーティン・チャズルウィット』は、ディケンズ文学

における看護とジェンダーの関わりを考察する上で重要な手がかりとなる作品であると言えるだろう。

そこで本論では、まず社会背景としてヴィクトリア朝時代における看護の実態を踏まえ、前期ヴィクトリア朝文学およびディケンズ文学にみられる看護のパターンを概観する。そして、『マーティン・チャズルウィット』において看護行為が物語展開に与える影響を比較検討し、作品における看護の意義を確認したい。

## II. 社会背景—ナイティンゲール以前の看護師事情

まず当時の看護師という職業にまつわる社会背景を簡単に押さえておきたい。もともと、看護はロバート・B・シューメイカー (Robert B. Shoemaker) が述べているように、公的な職業というよりはむしろ母から娘へと伝えられる家事労働のノウハウの一部であり、家庭内における女性の仕事の一つとして認知されていた。

As wives and mothers, women were expected to provide medical care for their families. Girls learned ‘physick’ form their mothers, and women augmented their skills from manuals of housewifery. (Shoemaker 180)

事実、ジェーン・レンドール (Jane Rendall) が「看護師は1851年の国勢調査ではプロの職業ではなく家庭使用人の形で登録されていた」(Rendall 75)と述べているように、『マーティン・チャズルウィット』出版以降でさえ、看護師は真っ当な専門職とは認められていなかった。看護は家庭で行うものという認識が根底にあり、通常の家事使用人よりは若干良い給料を得ることができたものの、<sup>2</sup>きちんとした看護の訓練を受けた看護師はほとんど皆無だった。ゆえに病院や救貧院における看護師の質は極めて低かったのである。本作品が書かれた1840年代は、フローレンス・ナイティンゲールらによる抜本的な看護師改革はまだ行われておらず、看護師という職業は労働者階級の女性が行う極めて卑しいものだと見なされていた。ナイティンゲールの『看護覚書』(Notes on Nursing: What It Is, and What It Is Not, 1860)の付録には、1851年に行われた国勢調査から得られた看護師の登録者数が書かれているが、それによると、職業看護師として登録しているものは25,466名おり、そのうちの84%にあたる21,548名が40歳以上の女性である(Nightingale 81)。彼女たちの多くは、まっとうに職務を果たさず、アルコールに溺れ、中には売春まがいのことまでしていた者もいた。<sup>3</sup> こういった状況が医療・看護師改革の遠因となり、古いタイプの看護師たちは男性医療従事者と女性看護改革者たちの双方から非難をあびる

ことになったのだ。というのも、キャサリン・ジャッド (Catherine Judd) が述べているように、まさに当時は彼らが医療や看護にまつわる職業の地位を向上させ、社会的にレスペクタブルなものとして認知されるよう努力していた時代だったからである。<sup>4</sup> さらに、看護という職業が注目されるに至った他の要因として、当時頻繁に発生した伝染病 (特にコレラとチフス) の流行や、科学や医療の進歩、そして『マーティン・チャズルウィット』とほぼ同時期に出版されたエドウィン・チャドウィック (Edwin Chadwick) の著作、『大英帝国における労働者の衛生状態に関する報告書』 (*Report on the Sanitary Condition of the Labouring Population of Great Britain*, 1842) による公衆衛生への関心の高まりがあげられる。このように、病・看護・公衆衛生・医療は、当時極めてアクチュアルでホットな問題領域だったのだ。

### III. ヴィクトリア朝文学・ディケンズ文学における看護 —看護人 / 患者の関係から

では、このような社会背景としての看護は前期ヴィクトリア朝文学およびディケンズ文学においてどのように扱われていたのだろうか。看護人と患者の関係という観点から整理してみることにしよう。

前期ヴィクトリア朝文学における定番の型は「女性看護人-男性患者」と「女性看護人-女性患者」であり、階級の上下はあっても、看護の行為者はほとんどが女性である。こうした看護の場面が登場する同時代の作品として、シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の『ジェーン・エア』 (*Jane Eyre*; 1847) や、エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) の『ルース』 (*Ruth*; 1853) 他数多くあり、その中では、看護が女性性や美徳を示す行為として扱われている。

一方、ディケンズの作品において看護は主に3つの型に分けることができる。第一に、多くのヴィクトリア朝の作品と同様、女性の義務・美徳の発露の一様式としての看護がある。それは主にヒロインたる娘たちによって行われ、『荒涼館』のエスター・サマソン、『リトル・ドリット』のエイミー・ドリットなど、ディケンズ作品でも特に多く見られる。彼女たちは主に家族・恋人・友人たちを看護し、それによって中流階級的な理想の女性としての義務を果たし、美徳を体現し、レスペクタビリティを獲得する。

第二に、職業看護師による看護があげられる。『マーティン・チャズルウィット』に登場するギャンプ夫人やベツィー・プリッグはその典型として登場し、さまざまな病人を看護する。しかし、ディケンズ作品における、職業看護師の数は、彼女たちを含めわずかに数名しかいない<sup>5</sup> というのも、ディケンズが生きた時代には実際の職業看護師が非常に少なかったという事情がある。ただし、

ギャンプ夫人が当時の悪しき看護婦像の代表例であり、社会批判の対象としてカリカチュア化されていたという点は、非常に特徴的であると言えよう。

ここまではすべて女性による看護なのだが、ディケンズ作品で特徴的なのは、こうした定番の型以外に「男性看護人-男性患者」のパターンが一度ならず見られることである。それが第三の男性による看護という型で、ディケンズ作品では男性の看護人が同性の患者を看病するというホモ・ソーシャルな関係を作っている。『ピクウィック・ペーパーズ』のサム・ウェラーや『大いなる遺産』のジョー、『互いの友』のモーティマー・ライトウッドらがその代表としてあげられる。

ディケンズに見られるこれら3つの看護の型のうち、他のヴィクトリア朝作品に比べても特徴的といえるカリカチュアとしての職業看護師による看護および男性の看護という2つの型が『マーティン・チャズルウィット』には含まれている。これから作品における個々の看護行為をみていくことにしよう。

#### IV. 『マーティン・チャズルウィット』にみる看護の諸相

##### 1. 女性職業看護師たちによる看護

まず、女性による看護は看護師たちによって行われるが、その一人ギャンプ夫人は ‘I will not deny [...] that I am but a poor woman, and that the money is a [sic.] object’ (474) と自ら言うように、明らかに職業意識というよりも自己の金銭欲にとらわれて仕事をしている様子が伺える。そして、以下の引用のように、彼女による看護は患者たちの健康回復にあまり役立ってはいない。

She [Mrs Gamp] moralised in the same vein until her glass was empty, and then administered the patient’s medicine, by the simple process of clutching his windpipe, to make him gasp, and immediately pouring it down his throat. (481)

この場面にもられるように、看護人であるギャンプ夫人は確かに患者（ここではリユーサム）に付き添ってはいるが、自分の飲食や飲酒に夢中で、患者に薬を飲ませる、夜通し付き添う以外の看護行為をほとんど何も行っていない。しかも、引用にあるように彼女の患者に対する薬の飲ませ方は非常に荒っぽく、思いやりに満ちたものとは言えない。

また、ギャンプ夫人は職業柄、患者やその周囲に関する秘密を知ることになる。たとえば彼女は、看護を頼まれた老事務員チャフィーの言葉や、マーティン・チャズルウィット老人の甥ジョーナスに毒薬を渡し、その後良心の呵責から病に伏せた医師リユーサムのうわ言などを聞く。しかし、彼女はそれらを

ただのうわ言と捉えてしまう。たとえば次の引用にみられるように、ギャンプ夫人は真実を言おうとしていたチャフィーを頭がおかしいと思い込み、看護と称してチャフィーの身体を激しく揺さぶり、彼の頭を混乱させ、何も言えなくさせる。しかも、ギャンプ夫人はそうしたことで彼女の看護のわざが勝利したと思っているのだ。

No doubt with the view of carrying out the precepts she enforced, and 'bothering the old wictim [*sic.*]' in practice as well as in theory, Mrs Gamp took him [Mr Chuffey] by the collar of his coat, and gave him some dozen or two of hearty shakes backward and forward in his chair; that exercises being considered by the disciples of the Prig school of nursing (who are very numerous among professional ladies) as exceedingly conducive to repose, and highly beneficial to the performance of the nervous functions. Its effect in this instance was to render the patient so giddy and addle-headed, that he could say nothing more; which Mrs Gamp regarded as the triumph of her art. (786-87)

このような看護行為によって、ギャンプ夫人たちは、物語に関わる大きな問題（アンソニー・チャズルウィットの死の原因とその息子ジョーナスの殺人疑惑）を解決することはなく、むしろ邪魔しさえしているのだ。実際の問題解決は帰国したマーティン青年らによって行われ、彼女はあくまでも脇役のままに留め置かれる。ベツィー・ブリッグのほうも同様で、患者であるリューサムの口に石鹸を突っ込み、一番硬いブラシで髪を梳き、服も適切に着せない（535-36）など、患者を人間的に扱ってはいない。こうしたことから明らかなように、彼女たちの看護によって患者たちが急速に回復することはなく、物語展開上として重要な意義を持たないのだ。

ところで、看護師ギャンプ夫人を語る際、彼女の想像上の友人であるハリス夫人のことは見過ごすことはできない。ギャンプ夫人は常に自分の看護師としての立場や行いをハリス夫人の口を通して正当化する。しかし、ハリス夫人の存在はベツィー・ブリッグとの論争の種を産むことになる。同じ看護師でありながら、ベツィー・ブリッグはハリス夫人の存在に対して共感を示さず、むしろ、想像の産物であるという真実を痛烈にギャンプ夫人に知らせるのだ。ここに、独立して看護を行うギャンプ夫人と病院看護師であるベツィーとの違いを見出すことも可能であろう。いずれにせよ、『マーティン・チャズルウィット』における女性の看護人は、村山敏勝が以下の引用で言うように、せいぜい粗野で頼りにならない看護人あるいは酔っぱらいで時代遅れの無能な産婆としてしか描かれていないのである。

He [Dickens] suggests a possibility of nursing as a new reputable profession for women, which would reflect a polymorphous moment of the mid-nineteenth century in the history of nursing, but the nurse is at best as vulgar, unreliable, and inefficient as the drunk, outmoded midwife. (Murayama 406)

## 2. 男性による看護

それに対して、男性による看護は献身的であり、物語上の大きな転換点を形成する。利己的な青年マーティンは、イギリスで建築家になる夢をペックスニフによって断たれ、一旗上げるべく旅立った先のアメリカの開拓地エデンでの土地購入の際詐欺にあい、無一文の状態ですぐに熱病にかかる。彼は従僕マーク・タプリーの献身的な看護を受けて回復するが、今度はマークが病に倒れ、マーティン青年が彼を看病することになる。周囲も病人ばかりで他に助けが得られないという事情もあり、男性同士の看護場面が登場するのである。まず、マーティン青年が病に陥ったとき、マークの友人たちが「わが身を省みず」看病し、マークも常に陽気に振舞い、愚痴一つこぼさず、献身的に看病する様子が以下の引用にみられる。

Martin indeed was dangerously ill; very near his death. He lay in that state many days, during which time Mark's poor friends, regardless of themselves, attended him. Mark, fatigued in mind and body; working all the day and sitting up at night; worn with hard living and the unaccustomed toil of his new life; surrounded by dismal and discouraging circumstances of every kind; never complained or yielded in the least degree. [. . .] He remembered nothing but the better qualities of his fellow-wanderer [Martin], and was devoted to him, heart and hand. (595)

ここで、マークがマーティン青年を看病する際、下線部にあるように「決して不平を言ったり、最後までつらい状況に屈したりせず献身する」様子が描かれている。マーティン回復後、マークが病に倒れて、マーティン青年が代わりに看護を行う際、マーティンが病の床にあったときと異なり、マークは常に自分が陽気であることを示し続ける。そして、マークを看病中にマーティン青年は利己的であった自分を反省することとなる。つまり、看護を通して自己を見つめなおすきっかけを見出したわけである。まず、マーティン青年はマークを看病しながら彼の持つ美点を見出し、その後自分との違いを見つけようとしている。

Now, when Martin began to think of this, and to look at Mark as he lay there; never reproaching him by so much as an expression of regret; never murmuring; always striving to be manful and staunch; he began to think, how was it that this man who had had so few advantages, was so much better than he who had had so many? And attendance upon a sick bed, but especially the sick bed of one whom we have been accustomed to see in full activity and vigour, being a great breeder of reflection, he began to ask himself in what they differed. (596)

次に、マーティン青年は看護を通して自分の「利己心」(‘Self’)が墓の中へと落ち込み、いかにそれが頼りない、つまらないものであったかを悟る。

He never would have known it, but that being newly risen from a bed of dangerous sickness, to watch by such another couch, he felt how nearly Self had dropped into the grave, and what a poor dependent, miserable thing it was. (597)

そして、マーティン青年は自分の欠点の原因が利己心であったとはっきりわかった時点で、それを捨て去ろうと心に決める。

He made a solemn resolution that when his strength returned he would not dispute the point or resist the conviction, but would look upon it as an established fact, that selfishness was in his breast, and must be rooted out. (597)

このように、マーティン青年はマークの看護を通じてそれまでの利己心を捨て去り、献身的な癒しの実践者となり、それによって彼はチャズルウィット家に遍在する「利己心」から脱し、精神的に成長を遂げることとなる。つまり、主人公は看護されることで身体の病から回復し、その後自ら看護することで「病んだ精神」からも回復し、新たな自己を得たのである。

さらに、互いの看護によって二人の間には階級差を超えた友情が確立され、それがイギリスへ帰る原動力となる。イギリスに帰国後、マーティン青年はマーティン老人と和解を果たし、遺産相続の見込みを得て婚約者メアリー・グレアムと結婚し、マークの方は青龍旅館の女将ルービン夫人と結婚してその宿屋の主人となるなど、経済的にも不調を脱することになる。男性同士の「癒し」は、このように身体的・精神的・経済的回復への転機となっているのだ、と言うことができるだろう。

## V. 結論

以上のように、『マーティン・チャズルウィット』という作品は、ギャンプ夫人やベツィー・ブリッグといった女性による看護に注目するならば、当時の看護師に対する批判及び社会風刺として読むことができる。その点についてはディケンズ自身、『マーティン・チャズルウィット』1868年版の序文において語っているとおりである。

Mrs. Sarah Gamp was, four-and-twenty years ago, a fair representation of the hired attendant on the poor in sickness. The Hospitals of London were, in many respects, noble Institutions; in others, very defective. I think it not the least among the instances of their mismanagement, that Mrs. Betsey Prig was a fair specimen of a Hospital Nurse; and that the Hospitals, with their means and funds, should have left it to private humanity and enterprise to enter on an attempt to improve that class of persons—since, greatly improved through the agency of good women. (42)

つまりディケンズは、病・看護・公衆衛生・医療という当時きわめてアクチュアルだった領域を、単なる文学的コンヴェンションではなく改革すべき社会問題として描き出し、その後のナイティンゲールによる改革、そして看護職の専門職化及びレスペクタビリティ獲得へ向けて歴史上の転換点をもたらしたといえる。それゆえ女性看護師による看護は、作中では当然カリカチュアとして否定的に描かれているのだ。しかし、『マーティン・チャズルウィット』における看護は社会風刺の要素には留まらない。プロの女性看護師による看護をアマチュアの男性による看護と対置するとき、二つのことが明らかになる。

第一に、男性による看護、とりわけマーティン青年によるマーク・タブリーの看護は、その無償性・献身によって特徴づけられ、女性による有償・非献身的看護との対比を通じて、看護行為における献身や自己犠牲といった精神的「美德」の概念を浮き彫りにしている、ということである。物語の最後でマーティン老人は次のように言っている。

'[A] little less liquor, and a little more humanity, and a little less regard for herself [Mrs Gamp], and a little more regard for her patients, and perhaps a trifle of additional honesty.' (894)

引用の波線部にはギャンプ夫人の看護方法において非難さるべき特徴（当時の職業看護師の一部にも見られた特徴でもある）が述べられているが、それだけではなく、下線部においては、理想的看護に求められる美德や倫理も提示されている。レスリー・A・フィードラー (Leslie A. Fiedler) が<sup>3</sup> 'Not that he

[Dickens] is opposed to demystification; but what he advocates is humanization rather than professionalization or certification.' (Fiedler 85) というように、ディケンズはプロフェッショナルリズムよりも人間らしさを支持するものとして看護という主題を考えているとみることができる。このように、看護とは卑しむべきものでなく、人間性・配慮・思いやり・誠実さといった美德を伴うレスペクタブルな行為であるという考えをディケンズが素描していた点は見過ごすことができない。

第二のポイントとして、『マーティン・チャズルウィット』においてそうした理想的な看護行為を担うのが、美德を体現すべき女性ではなく男性であるということの特異性があげられる。ヴィクトリア朝小説における主人公の病と癒しの場面といえは女性が関わるのが一般的であり、ディケンズ作品でもヒロインが主人公を癒し、物語の転換点となる場合は数多くある。しかし、『マーティン・チャズルウィット』においては、女性による理想的看護はマーティン老人に付き添うメアリー・グレアムの例だけで、それは物語の転換点にはならない。なぜ作中では、女性でなく男性が理想的看護の主な担い手とされているのだろうか。

もし『マーティン・チャズルウィット』の主題が、看護の実態の風刺・批判、および理想的看護の称揚にあったとするなら、ギャンプ夫人たちに対して、ヒロインによる理想的看護を対置したほうが話はずっと分かりやすかったはずである。しかも、仮に作品のもう一つの主題が「マーティン青年の selfishness からの脱却」であったとすれば、ヒロインの看護によって道徳的感化力が発揮されマーティン青年が改心するという展開にしたほうが、あらゆる点でヴィクトリア朝文学の規範に見事になかった作品となり、看護のテーマもいっそう明確に浮き彫りになったはずなのだ。にもかかわらず、この完璧と思えるパターンをディケンズは採用せず、理想的看護を男性による相互的な癒しという形で表現した。それはなぜなのか。看護するのが女性ではなく男性同士でなければならない理由とは何なのだろうか。

まず主人公の成長物語という観点で見ると、カミーユ・コラトステイ (Camille Colatosti) が以下のように述べている。

Ironically, heroes achieve selflessness only through an active process of self-discovery and self-control. Not until MC the Younger comes to terms with his own development—'discern[s] the truth' of his selfishness—can he begin to deny his desires. (Colatosti 10)

成長の鍵となるのは、看護の場面でマーティン青年が自分とマークを比較し、

自問自答できるようになったという点である。つまりマーティン青年は、看護し看護されるという行為の相互性を手がかりに、初めて自分自身を相対化する視点を得たのだ。もしここに性差・ジェンダーという非対称的な関係が持ち込まれたら、たちまち男女の愛や女性的美德が主題化され、看護や献身の相互性は失われてしまっただろう。したがって、主人公の成長のためには、女性による看護および感化力という受動的で非対称的な過程ではなく、男性同士の看護という相互的關係をつうじた能動的な自己発見が必要だったといえるのではないだろうか。

また、マーティン青年自身が以下の引用で言っているように、二人は男性同士の看護を通じて、単なる主従の間柄から心から信頼し合える友人同士となる。

‘But for this faithful man,’ said Martin, turning towards Mark, ‘whom I first knew in this place, and who went away with me voluntarily, as a servant, but has been, throughout, my zealous and devoted friend.’ (742)

二人は、『ピクウィック・ペイパーズ』のピクウィックとサム・ウェラーにみられる18世紀小説的な「主人－従僕」の關係に留まらない、友人という対等な關係を築き上げた。このように、相互的献身による階級差を超えた友情の確立というテーマを描く上でも、同性が互いに看護を行うことが必要だったと考えられるのである。

さらに、ディケンズ文学において、女性の看護と男性の看護には決定的な違いが存在する。それは、男性の看護による回復が、患者の身体のみならず経済力の回復も含意するという点である。特に男性登場人物が病に陥るとき、たとえば『骨董屋』のディック・スウィヴェラー、『リトル・ドリット』のアーサー・クレナム、そして『大いなる遺産』のピップなど、大抵の場合、全財産を失うといった経済的損失がその病の一因となっており、そのため男性患者を完全に癒すには経済的回復も必要となる。そして、それができるのは社会で経済力を握る存在、すなわち男性であることが暗示されているのではないだろうか。『マーティン・チャズルウィット』ではアメリカからの帰国費用を現地の友人である医師のベヴァンが援助し、帰国する船ではマークが料理人となってマーティン青年の旅費を稼ぐ。また、『大いなる遺産』でも、病に倒れたピップの借金を癒し手である養父のジョーが払ってやるなど、男性による経済的援助が見られる。いっぽう、女性の看護を受けていた『荒涼館』のリチャード・カーストンや『リトル・ドリット』のティップ・ドリットは、経済的苦境から脱出できずに亡くなってしまうのである。このようにディケンズ作品では、癒し手の性別によって患者の命運が左右される場合があるのだ。<sup>7</sup>

ここでようやく私たちは、先ほどの問いに答えることができる。本作において主人公の癒し手が女性ではなく男性でなければならない理由。それは、主人公マーティン青年が、相互的献身と癒しの関係をつうじて自己発見し、階級差を超えた友情を築き、経済的回復を遂げるためなのである。相互的看護を通じてホモソーシャルな関係を築いたマーティン青年とマークは、帰国後に経済力を回復し、それぞれ自分の愛する女性と結婚するという結末を迎える。彼らのヘテロ・セクシュアリティと男性性を強調するこの結末によって、本作品における「病と癒し」は、実は男性性を確立するための通過儀礼であったことが分かる。なぜなら、男性同士の癒しを通じてマーティン青年が得たものは、ホモソーシャルな相互関係への参入（すなわち社会性の獲得）、そして経済的回復、および結婚相手と、ヴィクトリア朝において男性に必要とされる要素のすべてだからである。つまり、男性同士の看護は、男性性の確立というテーマと密接に関わるものであり、物語上きわめて重要な局面を形作ると言えるのだ。

このように、『マーティン・チャズルウィット』にみられる男性同士の癒しの関係は、その後の『大いなる遺産』におけるジョーとピップの関係へと引き継がれ、物語展開において一層大きな役割を果たすことになる。それはつまり、男性性の確立という問題が、テーマとして重みを増していくことに他ならない。ディケンズ作品において男が癒し手になるとき、それは男性主人公の運命が、まさしく物心両面において大きな転機を迎えるときなのである。

## 註

\* 本稿は日本英文学会第79回大会（2007年5月20日、於慶応義塾大学）における研究発表に加筆・修正を施したものである。

\*\* 引用文中の下線はすべて筆者によるものである。

1. 「看護師（人）」（‘nurse’）の定義及び呼称を簡単に押さえておく必要がある。OEDによると、‘nurse’とは、「(1) 赤ん坊に乳をやる女性（乳母）、(2) 他人の世話をを行う人、(3) 病人の看護を行う人（一般に女性）＝看護師」とあって、看護をする主体は大抵女性である。一般に、(1)を‘wet-nurse’、(2)・(3)を‘dry-nurse’と呼ぶ。本稿では、基本的に(2)・(3)を主に扱い、職業看護師を「看護師」、及び家庭で看護を行う人を「看護人」と区別して表記する。
2. サリー・ミッチェル（Sally Mitchell）は、看護師の給料を‘a shilling per day in London, plus room and meals’（Mitchell 200）と述べており、労働者階級の仕事としては比較的良好な方であったとしている。

3. リー・ホルクーム (Lee Holcombe) は、当時の看護師の生活実態を次のように述べている。

The nurses of the day lived and worked in appalling surroundings; their work was considered a particularly repugnant form of domestic service for which little or no education and special training were necessary; their living was meager indeed; and not surprisingly, their ranks were recruited from among the very lowest classes of society. (Holcombe 68)

4. ミッチェルによると、レスベクタビリティとは、「絶対的な定義はない」ものの、「自立」という概念と密接に結びついている」(Mitchell 262)。レスベクタビリティ獲得には、経済面と精神面という二つの側面があり、看護に関しては精神面のレスベクタビリティ、すなわち慎ましさ・真面目さ・正直さが好ましいとされた。
5. ジョージ・ニューリン (George Newlin) の研究によると、看護師としてディケンズの作品に登場するのはわずか6名にすぎない、とのことである (Newlin 105-06)。
6. ここで興味深いのは、ベヴァンの職業は医者なのだが、彼自身は医師として「めったに、もしくは一度も医療行為を行ったことがない」(240)ということである。『マーティン・チャズルウィット』には、リユースムやジョブリングといった他の医者も登場するが、ジョブリングに至っては村山が言うように「ほぼ詐欺行為」に近いものであり、さらに、ベックスニフまでもが医師としての資格がないにもかかわらず医師として信用されているというのである (Murayama 403-04)。このように、プロとアマチュアという対立項で考えてみると、『マーティン・チャズルウィット』ではギャンプ夫人たち女性看護師に限らず、医療行為全般が非常に当てにならないものとして描かれていることが分かる。
7. ヴィクトリア朝においては男女の性的役割分業が確立していたという事実を思えば、女性に経済力が与えられていないのは自明のことだが、例外も存在する。たとえば『リトル・ドリット』ではエイミーが患者のアーサーに自分の財産を借金返済に使うよう提案するが、アーサーはこれを拒否する。女性で経済力を持っているのは『デイヴィッド・カパーフィールド』のベツィー・トロットウッドや『大いなる遺産』のミス・ハヴィシャムら年配の女性たちであり、彼女たちは(実際そうであるかはともかく)「良き援助者」の役割を果たしている。これらの例を見ても明らかなように、ディケンズは(殊に)ヒロインに経済力を付与させないように描いており、それがヒロインとして看護を行う際の美点になっていることには注意する必要がある。

## 引用文献

- Colatosti, Camille. 'Male versus Female Self-denial: The Subversive Potential of the Female Ideal in the Fiction of Charles Dickens.' *Dickens Studies Annual* 19 (1990): 1-24.
- Dickens, Charles. *Martin Chuzzlewit*. Harmondsworth: Penguin, 1968. なお、引用ではすべて(ページ数)であらわす。
- Fiedler, Leslie A. 'Images of the Nurse in Fiction and Popular Culture.' *Literature and Medicine* 2 (1985): 79-90.

- Holcombe, Lee. *Victorian Ladies at Work: Middle-Class Women in England and Wales*. Newton Abbot: David, 1973.
- Judd, Catherine. *Bedside Seductions: Nursing and the Victorian Imagination, 1830–1880*. Basingstoke: Macmillan, 1998.
- Mitchell, Sally. *Daily Life in Victorian England*. Westport, CT: Greenwood, 1996.
- Murayama, Toshikatsu. 'A Professional Contest over the Body: Quackery and Respectable Medicine in *Martin Chuzzlewit*.' *Victorian Literature and Culture* 30 (2002): 403–19.
- Newlin, George. *Understanding Great Expectations: A Student Casebook to Issues, Sources, and Historical Documents*. Westport, CT: Greenwood, 2000.
- Nightingale, Florence. *Notes on Nursing: What It Is, and What It Is Not*. 1860; New York: Dover, 1969.
- Rendall, Jane. *Women in an Industrializing Society: England, 1750–1880*. Oxford: Blackwell, 1990.
- Shoemaker, Robert B. *Gender in English Society 1650–1850: The Emergence of Separate Spheres?* Harlow: Longman, 1998.